

第10回みやぎ・やまがた
地域を超えてチャレンジする
女性の交流会

～ふくしまと共に未来に向けて発信～

第1部 パネルディスカッション

「女性の力でつくる東北の未来」

パネリスト

井上きみどり氏

(漫画家、コラムニスト／宮城県仙台市)

古川直子氏

(東日本電信電話株式会社山形支店長／山形県山形市)

石山純恵氏

(株式会社クリフ代表取締役／福島県福島市)

コーディネーター

宮原育子

(宮城大学教授、みやぎ・やまがた女性交流機構理事／山形県高島町)

概 要

みやぎ・やまがた女性交流会は第10回目となり、東日本大震災からも5年という節目の年となりました。今回は福島県からの参加者も迎えて、南東北3県の女性たちが、震災後の東北の社会の中で、どのように考え、活動していったらいいのかを「女性の力でつくる東北の未来」というテーマでパネルディスカッションを行いました。

●経歴・活動内容

井上きみどりさんは、関西生まれ、広島育ち、本籍地は東京、そして仙台に来て16年になります。中学生時代に広島で被爆者のヒヤリングの学習をし、阪神淡路大震災では親戚が被災し、仙台に来て東日本大震災を経験したことから何か役目を与えられているのではないかと感じています。元々漫画に関心があった訳でもない井上さんは、友人の勧めで漫画家のアシスタントに応募し採用されて働き、後に漫画家としてデビューしました。最初の出産後から11年にわたって描いた「子どもなんか大キライ」という育児漫画がヒットしま

した。その後、社会問題取材して漫画に描くというスタンスに切り替え、被災体験を描いた「私たちの震災物語」という震災漫画を出し、女性と子どもの視点から描く「ふくしまノート」の連載、海外取材で国際協力・国際支援を描く仕事をしています。

古川直子さんは、神奈川県で生まれ育ち、入社後は首都圏で、サービス、人事、ダイバーシティ推進などの部署に勤務しました。課長になったのは31歳の時ですが、肩肘張らずに部下の意見を取り入れ、部下に育てられてマネージャーになってきたといいます。そして神奈川県の川崎支店長から一昨年山形支店長に就任しました。いやだと思ふ仕事や大変な経験もありましたが、支店長になってみると、その経験が役に立ったそうです。現在は700人の部下をまとめながら、光回線などの設置・メンテナンス、情報通信ソリューション提案などの事業を運営しています。

石山純恵さんは、ご両親が営む福島の商家で生まれ育ちました。サラリーマン家庭に憧れて、東京で就職しましたが、入社半年目にデパートの景品で当たった海外旅行に行くために退社。ギリシャのアテネで知り合ったツアーガイドとの縁で、輸入業の会社を起業しました。その後フランス人と結婚、福島に戻って輸入業をし、語学塾を開き、子どもが生まれるとトライリンガルに育てたいと保育園も始めました。自社ビルも建て、順風満帆と思っていたところが、離婚となり、会社からも追い出されることになったのです。サラリーマンになろうと就職活動をしましたが、不採用ばかり。その中の1社の社長から県のインキュベート施設を紹介され、再び起業することになりました。そして現在は、正社員とパートを合わせて20人を擁し、多言語翻訳、研修、学童保育などの事業を行っています。

●仕事の中で気づいたこと・課題

井上きみどりさんは、震災後、講演会やシンポジウムなどで話をする機会に、震災、福島の問題について、年々人々の関心が薄れていくと感じています。そんな状況の中、被災体験を描いた漫画を読み、ニュースで情報として知ってはいたけれども、漫画を読んで初

めて当事者の気持ちが分かったという人がいました。漫画は、情報を伝える、人の思いを伝える1つの優れたツール、文章より、写真よりも伝わるツールではないか、その可能性を広げていきたいと思っているそうです。

古川直子さんは、情報通信の世界は日進月歩で変化しているので、お客様も自分たちもその変化についていく必要性を痛感しています。自身の役目としては、年配の部下にも諦めずにやる気になってもらうこと、部下を通してお客様に働きかけ、情報通信のセキュリティ面の重要性などを理解してもらうことです。そのために表彰制度などモチベーションを上げる仕組みを考えますが、一番社員と信頼関係を築くこと。そのため、折に触れて声をかける、頑張った時は一緒に喜ぶなど、日々地道な働きかけに努めているそうです。

石山純恵さんの最初の課題は社員とのコミュニケーションでした。社員に社長と同じ気持ちになって頑張ろうと言っていましたが、それは無理だと気づき、自分の気持ちや社員への期待を具体的に話し、社員の希望をよく聞く、そうした話し合いを細かくするようになったら、社内の風通しが非常によくまりました。現在は、震災後に力を入れている女性の創業支援です。女性の場合はお金の観点が少し抜けていると感じることが多く、お金の重要性を訴えますがなかなか伝わらないそうです。社会のため、地域のためといっても、お金にならない仕事とお金になる仕事のバランスをとって会社を成り立たせ、継続すること。そのお金の部分を真剣に考えながらやっていく必要性を起業したい人にどうしたら上手に伝えられるかと努力しています。

●東北の未来へ向けたメッセージ

井上きみどりさんは、どこに行ってもよそ者扱いされるそうです。でも、そのよそ者の視点が大切で、外の人々に発信して伝える、内の人々に外の情報を伝えて考えるきっかけを作る、そういう役目ができるのではないかと考えています。相馬市の高校生が同年代の人を福島に招くバスツアーを企画した時の取材で、東京から来た女子生徒が、これから福島と聞いて思い浮かべるのはニュースではな

く、友だちになった人の顔、話をきいた人の顔ですと言ったのが嬉しく、こうしたつながりが大切だと実感しました。女性の優れた発信力と受信力を発揮して、内と外とのつながりを持ち続けていこうと呼びかけました。

古川直子さんも、よそ者を強調します。山形の景色が美しいと同行する社員に言い続けていたら、その社員も今までと違う視点で見るようになったそうです。中にいると本当にいいものが分からない、よさを発掘するには外の目が必要な場面が多いと考えています。外国人の目をとおして発信された場所が有名になった例もあります。また、今はフェイスブックなどのツールもあるので、一人一人がつながっている一人一人に発信していけば東北が元気になっていく。自分もそんな手伝いをしていきたいと話しました。

石山純恵さんは、会社で「福島の今を語る」という事業も行っています。農林水産加工業者が語る人となって全国各地に出かけ、話をしたり試食を提供しています。その手配や記録が石山さんの会社の役目。顔の見える直接の交流が、互いの反応が分かってやりがいがあり、続けていきたいといいます。また、女性の発信力を生かし、SNSや口コミで生の声を伝えていくことが大切、さらに、人間力をつけて魅力ある女性たちが増えれば、自ずと東北は元気になるでしょう。元気な女性を増やすためにできることをやっていきたいと話しました。

●質疑

会場から、福島の現状を変えていくべく、女性のネットワークをつくって元気になっていきたいと思いますというコメントがありました。

また、ワーク・ライフ・バランスをどのようにとっているかという質問がありました。石山さんは、ワーク・ライフ・インテグレーション(統合)という考え方でやっている、古川さんは、会社の制度を上手に使いながら、肩肘張らずにオンもオフも楽しむようにしている、井上さんは、周囲の理解が大切と考え、取材内容を家族に詳しく話す、夫婦で月2回ほど外に出かけて話す時間を取ることを続けている、という答えでした。